

車のすぐれたサービスシステムを利用出来た事が、国産車の発展に大きな影響を及ぼした。

——中学生・女学生は

学徒隊を編成し島外に——

太平洋戦争に突入し、国家総動員令が発令され、島内にも戦争の足音は高くなった。昭和20年には、淡路島が米軍機の通過目標地点となり、連日連夜、米軍機接近のため警戒警報・空襲警報のサイレンが鳴りひびき、学校・隣組の防空壕に飛び込み警報解除のサイレンを待つた。洲本中学・洲本商業・淡路高女の中学生・女学生で学徒隊が結成されて、阪神地区の軍需工場（川崎重工・川西航空機・森永製菓等）に動員された。全島の未婚女性を対象に「女子艇身隊」が結成され川西航空機に動員され航空機の製造に従事した。学校では、上級生（五年・四年生）は島外へ、下級生（一・二年生）は松帆村の海軍航空隊の飛行場の建設に由良要塞を北上する米軍機を監視した。戦争末期の7・8月には、洲本市内の民間施設に艦載機の機銃の攻撃を受けた。カネボウ洲本工場の発電所と淡路交通の洲本宿所に、数発の弾痕が残つていた。幸い死傷者もなく、本土決戦の掛け声も、本当は恐いものである事を子供心なりに知つた。島内の主要工場は、軍の監督下に置かれ、軍需物資を生産していた。20年前後の洲本駅は鉄道が主力で駅舎も小さく、駅舎の隣に海軍の監督下の自動車の架装のための組立工場があつた。ラジエーターグリルに、

「イカリ」のマークのエンブレムが取付られた数台のボディの架装が行われて、前面のラジエーター・グリルが、左側のぞき見たのは、いすゞTX40型トラックではなかつたかと思う。戦中、軍部のいすゞ車のガソリントラックの信頼性は高く、特に航空隊が好み、特軍機の通過目標地点となり、連日連夜、行場用の自動車であつたのではと考えている。

日本の陸海軍で、最も自動車を多用したのは、旧関東軍であり、広大な中國大陸を連隊規模で運用した。昭和8年（一九三三）に正式に連隊が編成され、世界の軍事界でも話題になつた

日本陸海軍で、最も自動車を多用したのは、旧関東軍であり、広大な中國大陸を連隊規模で運用した。昭和8年（一九三三）に正式に連隊が編成され、世界の軍事界でも話題になつた

特にフォード・トラックが中国大陸に適し、悪路と耐久性には、他のシボレー、国産車のトヨタ・日産はフォードの行動力には追従出来なかつた。戦地での故障は「死」を意味し、占参兵はフオード車を使い、兵歴により車を選んでは、軍に微発されていった。民間所有の自動車の山上に監視所が設けられ、紀伊水道へ、又、防空監視隊として三熊山西隣の山上に監視所が設けられ、紀伊水道を北上する米軍機を監視した。戦争末期の7・8月には、洲本市内の民間施設に艦載機の機銃の攻撃を受けた。カネボウ洲本工場の発電所と淡路交通の洲本宿所に、数発の弾痕が残つていた。幸い死傷者もなく、本土決戦の掛け声も、本当は恐いものである事を子供心なりに知つた。島内の主要工場は、軍の監督下に置かれ、軍需物資を生産していた。20年前後の洲本駅は鉄道が主力で駅舎も小さく、駅舎の隣に海軍の監督下の自動車の架装のための組立工場があつた。ラジエーターグリルに、

——エンジン始動に

——二時間は普通——

当時のバスは、トヨタKB型・日産80型ヘセミキヤブオーバー型と呼ばれて、前面のラジエーター・グリルが、左側のぞき見たのは、一九八〇年代の、EG-Iと呼ばれる電子式燃料制御装置が装備された車からで、約10年前迄は、初心者はエンジンの始動に頭を痛めた。戦争のため生まれた様な「木炭バス」は27年7月頃まで存在した。

戦時型トラック（トヨタ・KC型）（日産80型）は、荷台の運転台をはずされシャーシーのみとなり、木製のイスにチューブに少し空気を入れたものをクッション代りとして、水泳用の水中スミッショーン下部とエンジン下部のオイルパン部を七輪（カントキ）に炭火を入れて加熱する事でオイルの粘度を低くして、回転抵抗を少しくして始動に備えた。正に職人芸で車のクセを熟知し、冬期や早朝の始動には技を競い合つた。それぞれが運転席の横の工具箱（バックの際はシートの代用をした）にビールびん又はサイダービンにガソリンを入れて保管していた。充分クラシックを入れて保管していた。岩屋港で潮待ちして、ハシケに「あゆび板」を使って乗せてタグボートで引き、明石港の岸壁とハシケの高さを満干にあわせて潮待ちして陸揚げされた。愛知県刈谷市の刈谷ボディ（現トヨタ車体）で架装され、一方木炭バスはガス発生炉はおろされて、ガソリンタンクに交換され、燃料パイプ・排気管の新設エンジンの交換又は、完全分解の上再生されて復帰して行つた。

——行きも帰りも潮まかせ——
フェリーボートの就航前の自動車の輸送は、小型車は、神戸・大阪で船積されて、洲本港でクレーンによっておろされたが、バス・トラックになると、大きく重量もあり、洲本港の施設は利用出来なかつた。岩屋港で潮待ちして、ハシケに「あゆび板」を使って乗せてタグボートで引き、明石港の岸壁とハシケの高さを満干にあわせて潮待ちして陸揚げされた。愛知県刈谷市の刈谷ボディ（現トヨタ車体）で架装され、同じ要領で岩屋へと運ばれ、天候待ちで4・5日を要する事も多かつた。

一方木炭バスはガス発生炉はおろされ、ガソリンタンクに交換され、燃料パイプ・排気管の新設エンジンの交換又は、完全分解の上再生されて復帰して行つた。